

第1部 三和文庫・横光家旧蔵資料一挙公開

これらの資料はすべて横光家（東京世田谷区）の旧蔵資料で、遺族が保管してきたものです。昨年末に三和文庫運営協議会が購入し、当館で所蔵することになりました。絶筆の小説「洋燈」、妻に宛てた手紙、川端康成ら交友作家からの手紙、海軍報道班員の身分証明書、文芸家協会の会員証、本籍地・宇佐が記入されたパスポートなど、どれをとっても大切な遺品ばかりです。

第2部 新感覚派のリーダー・横光利一

新感覚派は、横光利一、川端康成、片岡鉄兵、中河与一らをメンバーに、大正13（1924）年5月に創刊された同人雑誌「文芸時代」を主な拠点として活躍しました。第一次大戦後の西欧芸術思想の影響を受け、従来の自然主義的リアリズムに対して文学形式や文体上の革新を試みました。

そのリーダーであった横光利一は、「私は何よりも芸術の象徴性を重んじ、写真よりもむしろはるかに構造の象徴性に美があると信じていた」と書いています。

第3部 横光利一とふるさと ～テラシネの系譜～

横光利一には「ふるさとがない」といわれます。しかし、ゆかりある地域の人々の地道な顕彰活動により、母親のふるさと伊賀町柘植（三重）、青春時代を過ごした上野（三重）、本籍地である宇佐（大分）、夫人のふるさと鶴岡（山形）など、全国に次々と文学碑が建立され、作家時代を通じて過ごした東京では世田谷文学館に、横光利一コーナーができました。

さらに、生誕百年（1998年）を機に、全国のゆかりの地であいついでシンポジウムが開催され、ネットワーク構想が進められています。

第4部 横光利一と宇佐 ～切っても切れぬところ～

横光利一がおそらく人生の最後に身を寄せたふるさとが父祖の地・宇佐でした。そして、地元の人々は温かく彼を迎え入れました。

「旅愁」のなかで、老婆の一人が主人公の矢代に語りかけます。「あんたさん、これからたまには、お帰りなされるもんですぞ。なア、あんたさん、ここはな、あんたさんとは切っても切れぬところじゃによって、お墓もここに建てなされや。これなア、もうし、覚えていなされや。」

ゆかりあるどの土地に対しても、なじみの薄さに引け目のある横光利一には、「ここは私のふるさとだ」と自分から明言できる場所がありません。裏返せば、横光利一が生涯餓えていたのは、「ここはあなたのふるさとですよ」という地元からの認知だったのかもしれません。

矢代の帰郷の場面（宇佐の場面）は、未完に終わった「旅愁」という小説の、最後のクライマックスとなっています。

三和文庫 横光家資料収蔵記念展

～横光利一のすべて～

ごあいさつ

昭和18年の宇佐への帰郷を最後に、4年後の昭和22年、横光利一は世を去ってしまいます。49歳というあまりにも早い死でした。死因は胃潰瘍に腹膜炎を併発したものとされていますが、終戦前後の食糧難による慢性的な栄養不足と、敗戦による精神的痛手が、生命の衰弱に拍車をかけたものと思われる。その死によって、横光利一の次なる帰郷は永遠にかなわぬ夢となりました。

ところが、没後半世紀以上をへだて、三和文庫運営協議会の協力で、横光家の旧蔵資料がまとめて宇佐へ里帰りすることになりました。

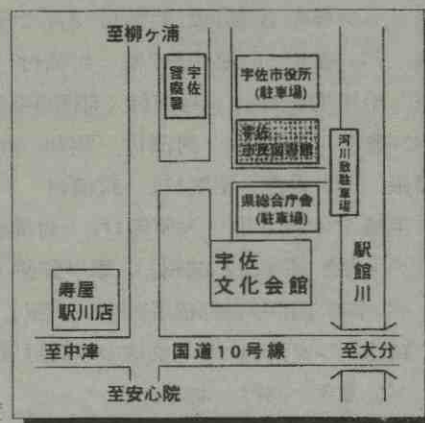
どうぞこのたびの横光利一の帰郷を温かくお迎えいただき、じっくりとその人と作品に思いをはせてください。

今回の展示では、収蔵資料の全貌をお知らせするという主旨から、スペースの関係で、詳しい内容まで十分にご覧いただけないものも多いかと存じます。それらについては今後、機会をあらためて紹介していく予定です。あらかじめご了承のほど、お願い申し上げます。

なお、三和文庫は三和酒類株式会社の寄付金で運営されています。

平成14（2002）年3月

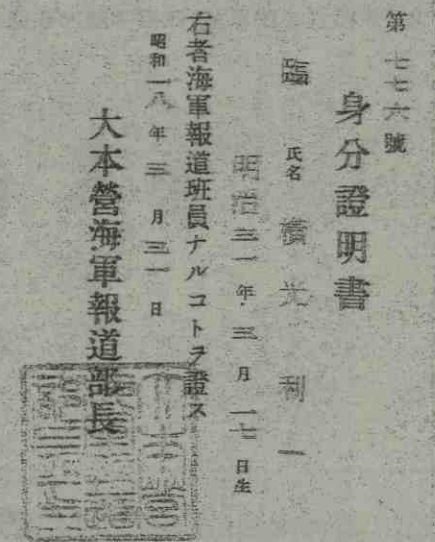
宇佐市民図書館
渡網記念ギャラリー



平成14（2002）年3月9日／発行・宇佐市民図書館
大分県宇佐市上田1017-1 TEL.0978-33-4600 FAX.0978-33-4679
ホームページ <http://www.usa-public-library.jp/>

三和文庫 横光家資料収蔵記念展

横光利一のすべて



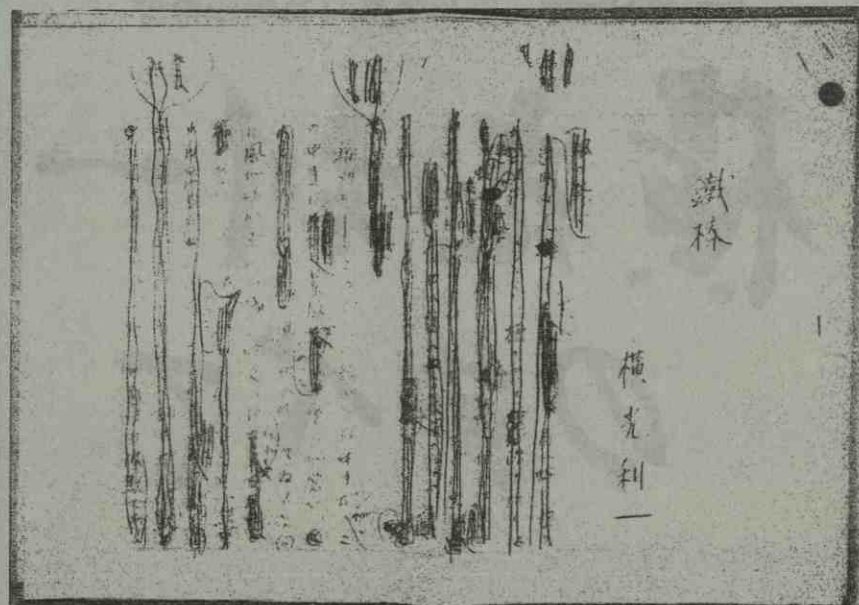
横光利一の海軍報道班員身分証明書

2002. 3. 9～5. 26

10:00～18:00（日曜のみ～17:00）
休館日…毎週月曜日・祝祭日・月末木曜日
※ただし、5/5（日）は開館。5/7（火）は振替休館日。

宇佐市民図書館
渡網記念ギャラリー

～横光利一のすべて～



2 「鉄棒」(小説草稿)四百字詰20枚完 (おびたしい推敲のあと)



8 「我等と日本」(パリでの講演原稿)用箋11枚完 (のちに手が加えられ、『考へる革』に収録)



45 佐野繁次郎画・横光利一のデススケッチ (佐野繁次郎は、マチスに師事した洋画家で、横光利一の本の装丁もてがけた)

◇44岡本太郎画・横光利一のデススケッチは『みんと』2002年3月号に掲載しています◇

出展目録

三和文庫 旧横光家資料 (全64点)

【原稿類】

- 1 「覚書」(随筆)四百字詰5枚完
- 2 「鉄棒」(小説草稿)四百字詰20枚完
- 3 「メカニズムと形式」(評論)四百字詰4枚完
- 4 「洋燈」(小説・絶筆)四百字詰11枚完
- 5 「微笑」断片(小説「微笑」の草稿)3枚
- 6 「無題」(川端康成「雪国」評)四百字1枚完
- 7 「家族会議」草稿(小説「家族会議」の下書き)18枚
- 8 「我等と日本」(パリでの講演原稿)用箋11枚完
- 9 「転換期の文学」(東京帝大での講演録)二百字詰43枚完
- 10 句稿断簡(俳句27句)二百字詰2枚ほか1枚

【色紙他】

- 11 「蟻台上に餓えて月高し/横光」色紙1枚
- 12 「ささなきの枝うつりゆく夕ごろ/横光」色紙1枚
- 13 団扇書「衣更へはるかに椰子の傾ける利一」1枚

【書簡類・妻への手紙】

- 14 横光千代子宛 団扇葉書 嵐山にて
- 15 横光千代子宛 絵葉書 昭和5年 川端康成、片岡鉄兵連名 箱根にて
- 16 横光千代子宛 便箋2枚 昭和11年 ロンドンより
- 17 横光千代子宛 絵葉書 昭和11年 ベルリンより

【書簡類・横光利一宛ほか】 ※印のみ全文紹介

- 18 池谷信三郎書簡※ ペン書き 便箋2枚 封筒付 昭和7
- 19 犬養健書簡※ ペン書き 便箋2枚 大連より 6月8日付
- 20 井伏鱒二書簡※ ペン書き 四百字詰原稿用紙1枚 封筒付 昭和10
- 21 井伏鱒二書簡※ ペン書き 四百字詰原稿用紙1枚 封筒付 昭和10
- 22 上野俊介書簡 毛筆便箋1枚 封筒付 8月19日付
- 23 大森義太郎書簡 ペン書き 便箋1枚 封筒付 昭和7年8月2日消印
- 24 川端康成書簡※ ペン書き 便箋1枚 封筒付 3月12日付 横光象三氏宛
- 25 川端康成書簡※ ペン書き 原稿用紙2枚 封筒付 昭和10
- 26 川端康成書簡※ 毛筆巻紙13行 封筒付 昭和9年10月?14日
- 27 吳茂一書簡 ペン書き 便箋3枚 封筒付 昭和21年1月26日消印
- 28 佐野繁次郎書簡※ ペン書き 便箋1枚 封筒付
- 29 徳富蘇峰書簡 毛筆 木版下絵 入便箋1枚 封筒付 昭和10年頃
- 30 福岡孝成書簡 ペン書き 便箋5枚 満州より 軍事郵便 封筒付 11月18日付
- 31 藤沢桓夫書簡 ペン書き 四百字詰原稿用紙3枚 封筒付 昭和6年5月23日付
- 32 藤沢桓夫書簡 雑誌「インタナショナル」切抜のみ同封 封筒付 6月19日消印
- 33 犬養健葉書※ ペン書き 23行 北平より
- 34 川端康成葉書※ ペン書き5行 昭和16年1月15日付
- 35 中河与一葉書※ ペン書き8行 昭和8年1月16日消印
- 36 藤沢桓夫葉書※ ペン書き20行 7月26日付
- 37 吉田絃二郎葉書※ ペン書き6行 1月5日付
- 38 中里恒子書簡 横光千代子宛 ペン書き 便箋2枚 封筒付 昭和31年8月4日付

◇4「洋燈」の原稿は『郷土スペース通信』2002年1月号で紹介しています◇

出展目録

【その他の関係資料】

- 39 北川冬彦宛葉書(差出人・しげ子) 昭和11年1月23日付
- 40 川端康成名刺(横光利一宛紹介状書き入れ)
- 41 海軍報道班員身分証明書(写真入り)
- 42 文芸家協会会員之証
- 43 欧州旅行時のパスポート(本籍地・宇佐が記入されている)
- 44 岡本太郎画・デススケッチ
- 45 佐野繁次郎画・デススケッチ
- 46 十日会会報 ガリ版3枚
- 47 横光利一 歓送会芳名帖
中山義秀、菊池寛、井伏鱒二、林芙美子、島木健作、小林秀雄、梅原龍三郎他署名
- 48 横光利一七周忌芳名帖
川端康成、井伏鱒二、舟橋聖一、高見順、芹沢光治良、神西清、草野心平、岡本太郎他95名の毛筆署名入り
- 49 「旅愁」第四篇校正刷
- 50 芥川賞・直木賞百回記念金時計 ケース付
- 51 横光利一愛用行李
- 52 犬養健揮毫「雨過山房」
「雨過山房」は、横光利一の書齋に犬養健がつけた名。
犬養健は新感覚派のメンバーのひとりで、首相になった政治家・犬養毅の息子。
- 53 横光象三草稿「北極光」292枚
他14篇完結原稿、その他、未完原稿多数
横光利一の長男・象三氏は、慶応大学在学中に、雑誌「三田文学」に作品を掲載するなど創作活動を開始。父の没後は、東和映画の宣伝部に勤めるかたわら、川端康成に小説の指導を受け、創作を続けていた。三島由紀夫らとも交遊があった。
- 54 横光利一自家用箋 四百字未使用11枚

【横光家旧蔵本】

- 55 『天使』創元社 昭和10
- 56 『盛装』有光社 昭和12
- 57 『覚書』金星堂 昭和15
- 58 『秘色』新声閣 昭和15
- 59 『上海』三笠書房 昭和16
- 60 『菜種』甲鳥書林 昭和16
- 61 『実いまだ熟せず』柏書院 昭和21
- 62 『川端康成短編全集』講談社 昭和39

横光章象宛毛筆署名入り。「横光章象」は長男・象三氏のペンネーム。名前をつけるとき、表記に「章象」の候補もあったということを父から聞き、時々、ペンネームに使っていた。

【複製原稿】

- 63 「旅愁」冒頭原稿 (日本近代文学館所蔵原稿の複製) 1枚
- 64 「寝園」原稿 (日本近代文学館所蔵原稿の複製) 1枚

◇43・横光利一のパスポートは『郷土スペース通信』2002年2月号で紹介しています◇



蔵書の落款印影